

2023年11月22日
カトリック中央協議会

COP28に焦点を合わせた、教皇フランシスコの新刊本 『ラウダーテ・デウム——気候危機について』12月8日発売

ドバイでのCOP28にてスピーチ(12/2)を控える教皇フランシスコ。COP28を見据え、気候危機を訴えた書“*Laudate Deum*”が発表されました。教皇の高次の公文書においてCOPという行事に全体の4分の1ものページを割くのは異例のことです。

本書の日本語版を、カトリック中央協議会から2023年12月8日に緊急発売します。

使徒的勧告 ラウダーテ・デウム——気候危機について

教皇フランシスコ・著
瀬本正之・訳

四六判並製 64頁 定価 495円(税10%込)
ISBN 978-4-87750-246-1



背景

本作は、気候変動に言及した最初の教皇文書、回勅『ラウダート・シー——ともに暮らす家を大切に』(2015年)に続くパート2と位置づけられます。8年を経て、臨界点を前にしながら気候危機に対するいまだ懐疑的かつ冷笑的な態度が消えない現実を前に、気候危機と格差問題(貧富および世代間)に向き合うべく、大胆な変革への連帯を求めて再び声を上げました。

バチカン市国とUNFCCC

バチカン市国は聖座として、国連気候変動枠組条約(UNFCCC)とパリ協定に加盟し、2050年までの温室効果ガス排出量ゼロの公約を掲げています(2022年10月4日付)。

教皇フランシスコは、11月30日よりドバイにて開催される第28回気候変動枠組条約締約国会議(COP28)でのスピーチを表明しています。これはローマ教皇による、初めてのCOP出席となるものです。

内容

本書公布日の10月4日は、カトリック教会の暦におけるアッシジの聖フランシスコの記

念日です。タイトル「ラウダーテ・デウム」は「神をたたえよ」の意で、太陽や月をも兄弟姉妹として見つめた聖フランシスコの、創造主である神が造られたすべてのもの（被造物）を愛し、それらとともに、それらを通して、神をたたえた生きざまを表す言葉です。この聖者への深い畏敬の念のもと、教皇フランシスコは「皆がともに暮らす家である地球」の危機に警鐘を鳴らしています。

教皇は、今の地球温暖化の問題、気候変動の原因が人為的なものにあることは疑いえないと明言しています。そして、人類に益をもたらした技術的な進歩に敬意を表しつつも、「最小限のコストと時間で上げうる最大限の利益」への過度な執着に見るように、「怪物のごとく自己増殖」し続ける「技術主義（テクノクラティック）パラダイム」の有害性を指摘します。そして、「人間と環境との相互作用に由来するもの」としての「健全なエコロジー」の追求を訴え、「人間の力」の意味と限界を「あらためて問い直す」よう促しています。

加えて、多極化、複雑化した現代世界にとって「効果的な協力体制」となりうる新たな「多国間主義」の再設計を求めます。そしてこれまでの気候会議の「前進と失敗」を具体的に列記したうえで、今回の COP28 には、「化石燃料の大輸出国」であるアラブ首長国連邦の主催にあっても、「効率的で、強制力があり、監視が容易、という三条件を満たす、拘束力あるエネルギー転換の枠組」確立への希望を失わず、各国リーダーに対し「政治の恥でなく、政治の高貴さを証明していただきたい」と訴えています。

こう語る教皇の視線の先にはつねに「貧しい人々」がいます。『ラウダート・シ』において標榜された「総合的（インテグラル）エコロジー」に根ざした理解では、環境危機はそれ単独で考えるべきものではなく、社会危機と切り離しえないものなのです。

COP28 閉幕直前にはなりますが、会期中に邦訳を刊行する運びとなりました。教皇の切なる願いを、カトリック教会の中だけでなく、広く日本の皆さんに届けたいと思っています。

訳者（瀬本正之 せもと まさゆき）

イエズス会司祭。上智大学名誉教授（神学部）。日本カトリック司教協議会「ラウダート・シ」デスク秘書。『ラウダート・シ』共訳者。

「ラウダート・シ」デスク（責任司教…成井大介 新潟司教）

回勅『ラウダート・シ』にて教皇が示した「インテグラル・エコロジー」を皆でともに歩むサポートのため、2022年に司教協議会内に設立された部門 (<https://laudatosi.jp/>)。

《補足》

回勅あるいは使徒的勧告とは、教皇公文書の種類を指します（内容や重要度による区分）。元来は司教、司祭、修道者などに向けられた教会内で流布される文書でしたが、時代とともにその性格は変化しています。本書『ラウダーテ・デウム』の献辞も、キリスト者の枠を超え「善意あるすべての人へ」となっています。